

計画 4-4

ニホンザルの B ウイルス感染の血清学的レトロスペクティブ検査

佐藤 浩, 大沢一貴(長崎大・先端生命科学研究支援センター), 景山 節(京都大・霊長研・人類進化モデルセンター)

B ウイルス(BV; Cercopithecine herpesvirus 1)に近縁のヒヘルペスウイルス (HVP2) 抗原が抗 BV 抗体検出に有効であることを報告し(1999), この ELISA キットを開発してきた。1999~2002 年の 3 年間に, 霊長研より送付されたマカク血清 432 検体 (1999 年: 15 検体, 2000 年: 157 検体, 2001 年: 149 検体, 2002 年: 111 検体) についての検査を纏めて報告する。

【材料と方法】

検査材料: -80℃で凍結保存されたマカク血清 432 検体. 抗原: HVP2 を vero 細胞に感染させ, 回収, 可溶化後の遠心上清をウイルス抗原液とした. 反応と発色: 96 穴プレートに抗原をコートし非乾燥抗原プレートとした. 発色にはビオチン化抗ヒト IgG, アビジン・ビオチン化ペルオキシダーゼによる増幅を介し, OPD を基質として発色, 硫酸で停止, 吸光度(492nm)を測定した。

【結果】

陽性: 88, 陰性: 340, 不定: 4 となり, 陽性率は 20% (88/432) だった. 霊長研での検査結果と比較すると, 1999 年には 14 検体で判定は一致し([+]: 3, [-]: 11), [+1 検体が長崎大では[-]と判定した. 2000 年は 157 検体のうち 156 検体で一致([+]: 38, [-]: 118), 1 検体が[±]>[-]だった. 2001 年は 149 検体のうち 145 検体で一致([+]: 24, [-]: 121), 4 検体([-]>[+]: 1, [-]>[±]: 3)でギャップが見られた. 2002 年の結果は, 結果不安定のため比較できなかった。

【考察】

検査結果にギャップの認められた血清は 1.8% (6/321)であった. ラボ, 検査者, 抗原プレート(キットと非乾燥)が異なることを考慮すると, 安定した試験結果であったと考えられる. スクリーニングには, 「感染の疑わしき個体を見逃さない」ことが最低の必須条件と捉え, 今後のキット開発に活かしていきたい。

計画 5-1

ウマヤザル信仰に伴う頭蓋骨の調査による口承と生息分布域の相関関係

中村民彦

ウマヤザル信仰とは既に猿の頭蓋骨や手を祀り牛馬の健康や安産を祈願したものである。当信仰は東北全域に流布していたが, 近代から現代における残留形態や口承の全容は十分に解明されていない。更に, これに関係するニホンザルの捕獲や捕殺の方法も不明である。今年度も当風習を知る古老からの口承を求め, 聞き取りにより記録し, ニホンザルの生息分布との関係を明らかにしようと岩手県を中心に予備的な調査を行った。調査の結果, 従来発見されている事例も加えると山形村 6, 久慈市 1, 野田村 1, 玉山村 1, 雫石町 2, 新里村 2, 沢内村 1, 東和町 1, 北上市 2, 江刺市 1, 肝沢町 1, 大東町 1, 前沢町 2, 平泉町 1, 藤沢町 1 の計 24 の事例を記録する事が出来た。保存形態の内訳は頭蓋骨 21, 手 3 である。頭蓋骨では牛馬の守護神, 薬用, 安産, 火災防止などの口承事例を得た。手については種まき時に使用すると豊作との口承事例を得た。頭蓋骨には無病息災や家内安全を, 手には五穀豊穡をと, 祈願の内容に使い分けが認められる。一方, 捕獲や捕殺の方法を詳細に知るインフォーマントは発見できなかった。当信仰が広く流布し, こうしたサル需要にサルマタギのような供給者が関与していたなら県下のサル生息地の消失を招いた狩猟圧の原因になった可能性も考えられる。厩猿の風習とニホンザル